

## トニ・モリスンが描く黒い肌の意味： 『神よ、あの子を守りたまえ』を中心に

大橋 稔

### はじめに

アメリカ黒人女性作家<sup>1</sup>であるトニ・モリスン (Toni Morrison, 1931-) は、「最も優れた芸術は政治的である。そして作家は疑いの余地なく政治的であり、同時に否定ができないほどに美しい作品を作り出すべきである」(“Rootedness” 345) と、作家の使命について記している。彼女はこの言葉通り半世紀近い歳月にわたって、多様な政治的メッセージが含まれた美しい作品を世に送り続けている。また彼女の創作活動は、小説、戯曲、児童書、論評など、多岐にわたっている。

モリスンの最新作『神よ、あの子を守りたまえ』(原題: *God Help the Child*, 2015年) は、原文で約180頁程度の中編小説である。本作が店頭に並んだのは2015年4月のことだったが、2014年12月に新作の発売が発表されるとすぐ、新刊を紹介するウェブサイトなどで「2015年最高の傑作がすでに書かれた」(Parham 参照) などと紹介され、また2015年に注目される作品としても頻繁に取り上げられた。これらのことから、本作への注目度が非常に高かったことが分かる。

実際の作品について言えば、やや短めの作品であるものの、モリスンの作品らしく技巧を凝らし、さまざまな問題を取り込んだ「政治的」で「美しい」作品に仕上がっている<sup>2</sup>。日本語訳を手掛けた大社淑子によれば、本作には「主に三つのテーマがある。(一)は美醜の問題、(二)はトラウマの問題、(三)は殺人を含む子供の虐待。これらの主旋律がモリスンの小説の例に漏れず、サブプロットが奏でる微妙で心に響く旋律と複雑に絡みあい反響しあって、中編ながら感動的な一大交響楽を現出している」(「訳者あとがき」234) とのことである。

新作に関する情報が発表された時、本作が育児放棄されたトラウマを背負った女性の物語であることが明かされた。さらに実際に作品を読み進めると、登場人物の多くが何らかのトラウマを抱えていることも明らかになる。そのためトラウマと関連させた観点からの書評が多く書かれている (Iqbal や Walker など参照)。また前述のような前評判にも関わらず、「初期の作品のわずかな名残をもたらし続けているに過ぎない」(Charles 参照) のように、どちらかと言えば否定的な評価も見受けられる。

『神よ、あの子を守りたまえ』の時代設定は現代である<sup>3</sup>。それにも関わらず、黒い肌の娘が生まれたことにショックを受け、夫婦関係まで崩壊してしまう設定について、少なからぬ評者が『青い眼が欲しい』(原題: *The Bluest Eye*, 1970年)との類似性や、ある種の「古さ」を感じ、否定的な評価を与える結果になったのだろう。しかし風呂本惇子が「連鎖を解く力」(2017年)において指摘する通り、本作が発表された2015年になっても、人種差別に起因する事件は後を絶たず、肌の色の問題は決して既に解消した問題、古い問題ではないのである<sup>4</sup>。さらに言えば、肌の色に起因する差別の問題を「古い」問題と見做してしまうような風潮があるからこそ、モリスンは改めてこの問題に取り組まなければならなかったとも言えるだろう。

作品が刊行されてからまだ2年程度ということもあり、『神よ、あの子を守りたまえ』に関する学術的な研究はそれほど多く公開されてはいない。その中で、サリグラマ・アイサルの「『神よ、あの子を守りたまえ』における翼と祈りについて」(Saligrama K. Aithal, "On a Wing and Prayer God Help the Child", 2016年)は、困難な環境の中で生きるそれぞれの登場人物に焦点を当てた作品の概説的な研究である。ブライドとブッカーそれぞれのトラウマと愛について論じたのは、ジーン・ワイアットの「『神よ、あの子を守りたまえ』における、愛、トラウマ、身体」(Jean Wyatt, "Love, Trauma, and the Body in *God Help the Child*", 2017年)である。ワイアットは、本作の特徴が早期に愛を喪失したトラウマを乗り越える「人間の能力に対する楽観主義」(sec. #03, para. #01)にあること、またブライドのトラウマの克服が、ブッカーとの関係を修復したことによってではなく、「彼女自身と彼女の人生についてより深く理解すること」(sec. #04, para. #06)で達成されたことを明らかにした。ジェシー・ゴールドバーグの「スウィートネスからトーヤ・グラハムへ」(Jesse A. Goldberg, "From Sweetness to Toya Graham", 2017年)は、『神よ、あの子を守りたまえ』に登場する「母性」に問題を抱えている母親スウィートネスと、息子を「守る」ために息子を殴りつけたトーヤ・グラハム<sup>5</sup>に言及した研究である。ゴールドバーグは、モリスン作品に登場する母性は一般的な概念から論じることは出来ないことを示し、母性に対して倫理的に要求されるのが子どもを守るのだとするならば、合衆国において黒人の母親は「不可能な倫理的な要求を満たすために常に行動している」(para. #01)ことを示した。一方、風呂本の「連鎖を解く力」は、問題を抱えた母親の代わりとしてその役割を補う「母代わり」(othermother)に焦点を当てた研究である。風呂本は本作品に登場するさまざまな「母代わり」の存在に言及しながら、「母代わり」は、人種とは関係なく、血のつながりがあってもなくても、年上だろうと年下だろうと、そして世話する期間が長くても短くても、人と人の間に成り立つきずな」(234)だとしている。またこのような「母代わり」を描くモリスンの意図は、「母親」という概念を拡大することにあつたとまとめている。

このような学術的状况の中、本研究では大社が主要なテーマとして掲げた三つの中から美醜の問題を取り上げ、黒い肌の意味という観点から分析する。モリスンの作品世界におけるさまざまな困難の背景には、常に人種、肌の色という問題が存在しており、彼女の表現活動の意図を探るためには不可欠な作業だと考えるためである。具体的には、本作において「黒い肌」がどのように意味づけられているのかを作品の流れに沿いながら抽出し、モリスンが今日改めて肌の色の問題を取り上げた意図を探る。またこれらの分析を通じて、アメリカ黒人女性文学史における本作の位置づけを検討したい。

## I. 美醜の問題としての肌の色

欧米、特に合衆国の人種差別的な文化は、白い肌を「美」、黒い肌を「醜」とする価値観を形成することで維持されてきた。つまり人種差別体制の下では、肌の色の問題とは美醜の問題でもあるのだ。だからこそアメリカ黒人たちは、“Black Is Beautiful”というスローガンを掲げ、1960年代以降の人種差別撤廃運動を展開しなければならなかったのである。以下ではフェミニズムにおける美醜に関する議論を概観し<sup>6</sup>、黒い肌への意味付けとの類似性を確認しておきたい。

美醜に関する問題は、フェミニズム分野における重大な関心事であった。なぜなら女性たちは、美と位置付けられた判断基準に合致する容姿の獲得を目指して努力するよう促されてきたからだ。美醜の判断基準が、家父長的、男性中心的、男性優位の社会や文化の構造によって構築された基準であるにも関わらずだ。また女性が自身の身体を美の判断基準に合致させようとする行為は、女性同士を競争相手の位置に追い込み、女性の連帯を難しくさせ、男性の女性支配を容易くさせる機能を果たしてきた。つまり美醜の問題とは女性を抑圧しつつ分断するシステムであり、美に合致させることを強要する社会や文化の被害者として女性は位置づけられることになる。

しかしこのような議論は、誘導されたものであったとしても自らの「欲望」と信じ、美の基準に合致させようとする女性の「主体的」行動を不可視にしてしまう。1990年代以降、この問題への取り組みがなされるようになる。ポスト・モダン・フェミニストたちは、女性が美の基準に合致した身体を手にしようと努力することで、女性が美醜に関する基準の維持に加担させられている社会や文化の構造を明らかにした。つまり女性は、美醜の基準を通じて美を求めるという主体性を獲得すると同時に、美醜の基準という女性を抑圧する社会的文化的構造の維持に協力させられていたのだ。

女性を抑圧する構造の維持に女性自身が加担するのは、美の側に位置すると判断されることで女性に利益がもたらされるからである。美によって女性にもたらされる利

益の多くは、性や結婚、恋愛など、私的空間に関わるものが多いのかもしれない。しかし夫の社会的地位を通じて妻の地位が決定される社会や文化において、女性が手にする利益が純粹に私的領域のみに限定されることはなく、それらは常に公的領域と関連している。

つまり女性は、美醜の基準を設定し維持する社会や文化の構造に加担するだけでなく、その基準を利用して利益を得てもいるのである。フェミニズムにおける美醜に関する議論において女性は、被害者でありながら、構造維持に加担する者でもあり、さらには利益の享受者でもあり得ることが明らかにされたのだ。そして利益の享受者であるということは、価値基準に合致することのできない存在に対しては、間接的、あるいは場合によっては直接的に加害者でもあることを意味している。

このようにフェミニズムによって導き出された美醜に関する社会や文化の構造についての知見を用いながら、肌の色によって序列化される社会や文化を考察することが可能である。美醜の判断基準が女性を抑圧する機能を果たしていたように、肌の色はアメリカ黒人にとって抑圧機能以外の何物でもない。また女性が美の基準を利用しながら利益を得ていたように、一部の黒人もまた肌の色に関する基準を利用することで利益を得ていた。その顕著な例がパッシングであると言えるが<sup>7</sup>、それ以外にも肌の色によってより優位な地位を得る方法があった。その一例が、トニ・モリスンの『青い眼が欲しい』でも描かれている。肌の色が薄い黒人の少女モーリーン・ピール(Maureen Peel)は、自分より色の黒いピコーラを醜いと罵ることで、彼女自身が優位であることを誇示し、自尊心を保っていたのだ<sup>8</sup>。

差別の対象であるはずの一部の黒人自身が、肌の色に意味を付与する社会や文化の価値観を利用してもいる構造は、女性と美醜の関係と同じである。またこのことは特権を利用することで一部の黒人もまた差別構造の維持に加担する主体者でありながら、差別構造への隷属者でもあるという両義的な立ち位置を形成していることを意味している。

このようにフェミニズムの分野でなされてきた美醜に関する議論を援用しながら肌の色によって序列化を図る社会や文化を分析することは可能である。しかし留意しなければならない点もある。女性の身体はさまざまな努力を経ることで、美の基準に適合し得る可能性がある。しかし肌の色の場合、それは身体的な特徴に属する問題であって、個人的な努力で克服することが出来ないことだ。この点に留意しつつ、モリスン作品における黒い肌の意味を考察することにした。

## Ⅱ. モリスン作品における黒い肌の意味の変遷

トニ・モリスンはデビュー作『青い眼が欲しい』より、黒い肌の問題を扱ってき

た。その姿勢は『神よ、あの子を守りたまえ』においても引き継がれていると言える。本作において黒い肌がどのように扱われているのかを考察するのに先立ち、モリスンの視線がどのように変化しているのか、あるいは変化していないのかについて年代を追いながら概観しておくことにしたい。

## 1. 唾棄されるべき黒い肌

『青い眼が欲しい』において黒い肌によって人生が翻弄されるのは、ピコーラ・ブリードラヴ (Pecola Breedlove) であった。彼女とその家族はみな、黒い肌であるがために自身を醜いと思ひ込み、「醜さのマント」を身にまとった一家であった。自身を醜いと思ひ込んでいるために、その行動自体も醜いものとなってしまうていた。そしてピコーラは、彼女に課せられている不幸を拭い去るためには、白人のように青い眼が必要だと思ひ込み、精神を破壊させてしまうのである。

『青い眼が欲しい』の登場人物にとって黒い色の肌は、社会的に抑圧される根拠であり、醜さの象徴であり、それらから逃れるためには唾棄しなければならないものとして描かれている。もちろんモリスンの意図が、黒い肌を捨て去れと主張することにあるのではなく、黒い肌を醜さの象徴と位置づける社会や文化の構造を告発することにある、また無批判にその構造を受け入れてしまうことの危険性を指摘することにあることは異論がないことだろう。

肌の色に付与された意味が、社会や文化によって構築されたものに過ぎないことが、『青い眼が欲しい』の随所で指摘されている。例えば、冒頭に掲げられたディックとジェーンの物語の三つのバリエーションは、社会的、文化的に構築された価値が文法という価値体系を学習することによって理解され、内面化されることを象徴的に示している。またピコーラはタンポポを美しいと思っているが、タンポポが美しいとみなが思わないから雑草として扱われていることも知っていた。しかしピコーラは、黒い肌に与えられた醜さという意味が、文化や社会的な価値観によって構築されたものだとの認識に到達することはなく、黒い肌を唾棄すべき対象と考えたまま物語は閉じることになる。

## 2. プライドとしての黒い肌

1980年代になると、第4作として『タール・ベイビー』(原題: *Tar Baby*, 1981年) をモリスンは発表する。この作品では、モデルとして国際的に活躍し、美と知性を兼ね揃えた黒人女性であるジャディーン・チャイルズ (Jadine Childs) と、伝統的な黒人文化の世界に生きる男性サン・グリーン (Son William Green) との恋愛が描かれている。ジャディーンにとって黒人文化は捨て去るべきものであった。一方サンの場合、黒人文化は自らの拠り所であって、唾棄すべきものではなかった。このように考



えると、『タール・ベイビー』の主要な物語を織りなす二人は、黒い肌や黒人の文化に接近する態度において対照的な人物であった。そして二人は、それぞれのパートナーに自分が「正しい」と信じる方法で、黒人文化と接することを求めることになる。しかしながら両者が、相手の文化への接近方法を受け入れることはなかった。

しかしここで特に着目したいのは、ジャディーンやサンではない。ジャディーンがパリで出会ったカナリア色のドレスを着たアフリカの女性である。この女性は次のように描かれている。

長いカナリア色のドレスの下には、大きすぎる腰と大きすぎる胸があるのがジャディーンにはわかっていた。モデル・エージェンシーならロビーに入ってきただけであきれて追い出すだろう。だが、それならなぜ、店にいる彼女もほかの誰も彼もが釘づけになって立ちつくしているのだ？ 背丈のせいかな？ タールのような皮膚とカナリア色のドレスの対比にか？ 女は多色のサンダルで床に黄金色の足跡をつけて通路を歩いて行った。(45/47)<sup>9</sup>

作品中名前も与えられていない存在であるにも関わらず、ジャディーンは唾を吐きかけられた体験により、彼女との出会いに強い衝撃を得ている。彼女のこの行動は、黒人文化を捨て去り白人文化の価値観を体現しているジャディーンに対する痛烈な批判として受け取られるのである。モリスンは、このカナリア色のドレスの女性を通じて、黒い肌は唾棄すべきものではなく、むしろ生き抜くためのプライドの根拠として扱っている。またモリスンは、このアフリカ人女性を登場させることによって、ジャディーンが白人化するために捨て去ったものが何であったのかを示したのだ<sup>10</sup>。

### 3. 内面化された黒い肌

1990年代に描かれた作品の中で、黒い肌の意味を特に問うているのは、第7作『パラダイス』(原題: *Paradise*, 1997年)である。この作品の舞台は黒人だけが住む町、オクラホマ州ルビーであった。この町に白人文化や白人的な価値観の浸食の形跡は見られない。そしてこれまでの作品では黒人社会においてでさえ肌の色が白により近い方が優位となる現実が描かれていたのに対し、この作品では黒人のみの社会ルビーはより黒い肌の方が優位となる場と設定され、現実とは真逆の社会が描かれている。

肌の色が黒いために黒人は白人によって差別されてきたと考えられてきた。つまり黒人は肌の色を根拠に構築された社会や文化のヒエラルキーによる被害者として語られてきたのである。しかしモリスンは『パラダイス』を描くことで、肌の色の濃淡によって人を序列化する構造は白人によってのみ維持されていたわけではないことを示し、肌の色による序列化を内面化している黒人もまた、人種差別的な政治、社会、文

化体制の構築，維持に加担していることを示したのだ。

2000年代以降モリスンは、『ラヴ』（原題：Love, 2003年），『マーシィ』（原題：A Mercy, 2008年），『ホーム』（原題：Home, 2011年）を発表している。これらの作品で彼女は，黒い肌の意味を前景化させてはいない。しかし物語の基底に「黒人であること」があるのはこれまでの作品と変わらない。この時期彼女は，オペラや戯曲に加え，多くの児童書<sup>11</sup>も執筆しており，これまで小説で描いてきた問題意識を展開させている。そして2015年，第11作『神よ，あの子を守りたまえ』が発表された。

### Ⅲ. 『神よ，あの子を守りたまえ』と黒い肌

『神よ，あの子を守りたまえ』において，黒い肌による影響を最も被っているのがブライド（Bride）である。以下では，彼女に黒い肌の意味を教えた人物として，母親であるスウィートネス，かつての恋人であったジェリ，そして現在の恋人であるブッカーの三人を取り上げ，それぞれがブライドにどのような影響を与えたのかを考察する。

#### 1. スウィートネス

肌の色が黒いことの社会的意味をルーラ・アン・ブライドウエル（Lula Ann Bridwell, のちにブライドと名乗る）に教え込んだのは，母親であるスウィートネス（Sweetness）であった。子どもにとって親の影響が多たであることは，議論の余地がないことであるが，ルーラ・アンの誕生により夫婦関係が破綻し，シングルマザーの母娘として生活せざるを得なかった家庭環境を考えるならば，スウィートネスの影響はさらに甚大であったと考えられる。

白人としてパッシングできるほどの白い肌をしたスウィートネスにとって，「タールというのが，思いつくことのできる一番近い」（3/7）肌の色をしたルーラ・アンの存在は，受け入れ難いものであり，彼女を混乱させた。その混乱ぶりは「毛布をあの子の顔にかぶせて，押さえつけた」（5/9）ほどである。もちろん彼女は「正気」を取り戻し，娘を殺すには至らなかったが，以後，彼女にとって娘は嫌悪の対象でしかなくなる。少なくとも娘の眼にはそのように映り続けた。

スウィートネスは娘に自分のことを，「お母さん」や「ママ」ではなく「スウィートネス」と呼ばせた。その方が「安全」（6/11）だと考えたからだ。また父親がルーラ・アンに決して触れようとはしなかったように，彼女もまたルーラ・アンに触れようとしなかった。まだ幼いルーラ・アンをお風呂に入れる時ですら，「彼女の顔いっばいに嫌悪感が広がっていた」（31/45）。そしてそのことを娘は確実に感じ取っていたのである。

ルーラ・アンは母親に触れて欲しい一心で、悪ふざけをすることがあった。彼女は「顔を平手打ちするとか、お尻を叩いてくれたら」(31/45)と願い、ほんの一瞬に過ぎない身体的な接触を期待していたのだ。しかしスウィートネスは、夕食抜きにするなど、「自分が憎んでいる肌には触れずに罰するいろんな方法」(31/45)を実行し、ルーラ・アンに直に触れることはなかった。

娘ルーラ・アンの眼から見れば、スウィートネスの態度は拒絶であったと言えるし、その事実は否定出来ない。しかしスウィートネスの意図を見過ごすことは不公平であろう。

ええ、その通りよ。時折、ルーラ・アンが小さいときにどんな扱い方をしたかを考えて、かわいそうだったと思う。でも、わかってくれなくては。わたしはあの子を守らなければならなかった。あの子は世間を知らなかったから。自分が正しいときでさえ、強情な態度を取ったり、生意気な口をきいたりしても得るところはない。口答えをしたとか、学校で喧嘩したとかいうだけで少年院に入れられるかもしれない世界、雇われるのは最後でクビになるのは最初という世界では。あの子はそんなことは何一つ知らなかった。(41/57, 強調点は引用者)

ジェシー・ゴールドバーグが指摘するように、子どもを守ることこそが母親に求められる役割だとするならば (para. #01), その役割をスウィートネスは果たそうとしていたことが分かる。つまり彼女の意識のなかでは、黒人の母親として差別が横行する社会のなかで生き抜く方法を教え、子どもを守るという役割を果たそうとしていたのだ。親の身勝手な言い訳による「躰」という名目で児童虐待の多くがなされている状況において、彼女のこの後付けのような言い訳が正当化されてはならない。しかし未だに黒人の母親が、彼女のような方法で子どもを守らなければならないと考えなければならない現状も見過ごすことは出来ない。

さてこのように育てられた結果ブライドは、「恐怖が支配するときには、服従するのが唯一の生き残れる道」であることを学び、「行儀よく、行儀よく、行儀よく」振舞うようになり、「一度も抵抗したことのない」(31-32/45-46)少女として成長することになる。黒い肌が嫌悪の対象となること、そして社会的な不利益を生み出すことを母から学び、少なくとも彼女が育った環境の中で肌の色が黒いことに起因する被害を受けずに済む方法を身につけたのだ。彼女は学校で、「白い紙の上のインクの染みのような汚点として」(56/78)扱われても、沈黙を守り、停学や退学処分を回避するために学校側に対してすら何ら抗議をすることもなかった。

このように「行儀よく」育ったルーラ・アンであったが、高校卒業と同時に「田舎くさくて野暮ったい名前」(11/18)を捨て、家を出る決心をする。彼女のこの旅立ち



は、スウィートネスに代表されるような黒い肌に対する嫌悪感や、黒い肌を劣ったものとみなす価値観との決別を意味すると解することができる。しかし同時にこのことは、母の肌の色に関する「嫉」にも関わらず、彼女の中に自らを劣ったものと位置づける価値基準に対抗する心が宿り続けていたことをも意味する。

## 2. ジェリ

ルーラ・アンが名前を捨て家を出た後、ブライドに黒い肌の社会的意味を教えたのは、ジェリ (Jeri) だった。彼は「トータル・パーソン」デザイナーを自称する男性で、ブライドに白色のみを身につけるように勧める。単に白い服を着ることを勧めただけではなく、身につける小物も色を極力控え、どうしても必要な時だけ黒のバッグと靴のみにするよう勧めた。

「それから、忘れてはいけないよ。メーキャップはなし。口紅やアイラインもだめ。何もなしだよ」(中略)「宝石類はまったくなし。たぶん、小粒の真珠のピアスくらいならいいかも。いや、それもなしだ。きみだけだよ、いいね」(34/48)

ジェリは「きみだけだよ」の言葉に象徴されるように、ほかの何かを頼りにするのではなく、ブライド自身そのもので居ることを勧める。彼は「黒こそが新しい」(33/47)と説明し、「黒は売れるんだよ。黒は、文明社会のなかで一番ホットな商品なんだ」(36/51)と主張する。ここで着目すべきなのは、スウィートネスによって叩き込まれた社会的な劣等の象徴としての黒い肌が、ここでは「新しい」「一番ホットな商品」とされていて、むしろ優位の象徴になっていることである。だからこそ、ジェリの助言を受け入れた彼女は、それまでうまくいかなかった化粧品販売カウンターでの職を手にし、「あつという間に」(36/51)リージョナル・マネージャーにまで昇進するのであった。

このようにして社会的な成功を手にしたブライドは、16歳のルーラ・アンに次のように語りかける。

わたしはワイングラスについた口紅の微笑を見て、ほほえまずにはいられなかった。これをどう思う、ルーラ・アン？ あんたは大きくなって、これほど魅力的な、あるいは、これほど成功した人物になると思ってた？ (11/18)

確かにブライドはジェリの助言により、道を歩けば誰からも振り向かれるような、「美」を備えた女性へ成長した。しかしここで注意しなければならないのは、彼女自身の肌の色の「見せ方」を変え、それにより自信を手にしただけであり、肌の色は変

わっていないということである。

ジェリは白い服のみを身につける意味を、だれもがホイップクリームとチョコレートスフレを思い出すようにするのだと説明し、「でなきゃ、オレオ？」と茶化すブライドに、「絶対だめ。高級で洒落たものでなくちゃ。ボンボン。手をかけたやつさ」(33/48)と応える。このやり取りに、肌の色の意味がその「見せ方」あるいは自己評価によって大きく変わることが示されている。そして自信が加味されることで、その効能は効果的に発揮される。自身を安物と評価するのか、それとも高価なものとして評価するのかにより、黒い肌の意味が変わり得ることを、ジェリはブライドに教えたのであった。

### 3. ブッカー

ブッカー・スターバーン (Booker Starbern) は、ブライドが「彼がいかに美しかったか、肩の上の醜い火傷の痕を除けばいかに完璧だったか」(37/53) と考えた男性だった。また彼女は彼のことを、「彼女が対峙できる唯一の人間だった」(98/132) とも評している。一方ブライドにはじめて会った時に受けたブッカーの衝撃について、「ただただ彼女の美しさに口も利けないほどの衝撃を受けて、ブッカーは道の縁石のところに立って笑っている青黒い肌の、若い女性を、口を開けて見つめていた」(130/172-173) と書かれている。

ブッカーはブライドに、肌の色、人種にこだわるのが意味のないことだと教えた人物であった。ブライドが黒い肌のために母親から疎まれたこと、またいかにしてその肌の色を魅力に変えたのかをブッカーに話したことがある。以下の引用は、ブッカーの返事である。

「それは単に色の問題じゃないか」とブッカーは言った。「遺伝子による特徴で——欠点ではないし、呪いでもない。幸運でもないし、罪でもないよ」(中略)  
「科学的には、人種なんてものは存在しないだよ、ブライド。だから、人種がないのに人種差別しようとするのは、選択の問題にすぎない」(143/186-187)

このブッカーの発言は、単なる特徴に過ぎない肌の色に多大な意味を与えようとする行為自体が、意味のない行為であることを示している。人の能力は、肌の色によって先天的に決定されているものではない。黒い肌の色が社会的な劣等性のシンボルや、成功の源泉となり得るのは、肌の色に意味を付与し、肌の色によって能力の優劣を判断しようとする社会や文化体制の問題なのである。ブッカーは先の引用に続けて次のように話す。

「もちろん、そんなことを必要としている人々によって教えられてはいるけれど、それでも選択の問題なんだ。それを守り続けている人たちは、それがなければ無に等しいから、そうするんだよ」(143/187)

肌の色によって社会的、文化的な意味付けをされているのは黒人だけではない。白人もまた肌の色によって優越性が意味付けられているのだ。その地位を守るために白人は、本来意味のないはずの肌の色に意味を与える仕組みを維持しなければならないのだ。そして黒人が肌の色にこだわり続けることは、肌の色で優劣を規定し黒人を差別する社会や文化構造の維持に、黒人自身が加担することになってしまうのだ。

しかしこのようなブッカーのメッセージが、ブライドに理解されるまでには、時間が必要であった。彼女は、「彼の言葉は合理的で、当時は慰めになったが、毎日の経験とはほとんど関係がなかった」(143/187)と述べている。黒い肌が社会的に意味付けられることによる彼女の体験は、育児放棄や幼児虐待と呼べるようなものであったり、想像もできなかったほどの社会的な成功であったりと、彼女自身の合理的で理性的な理解を凌駕するものであった。それゆえに彼女が、彼のメッセージを理解するためには、身体が幼児化するという、非現実的な体験が必要だったのだ。

この現実を超越した体験を経ることでブライドは、黒い肌の色の意味が社会的、文化的に構築されたものに過ぎないことを理解した。このことは物語の終わり付近に登場する、「子供。新しい命は、悪や病からは免れており、誘拐、殴打、強姦、人種差別、侮蔑、痛み、自己嫌悪、放棄からは保護されている。過誤はなく、すべてが善。怒りもない。そう彼らは信じている」(175/228-229)という言葉が象徴的に示している。

モリスンが批判の対象としているのは、肌の色だけではない。彼女はまた、社会的文化的な優劣を判定するあらゆる基準が構築物に過ぎないことを示してもいる。ブライドを事故から救ったスティーブ(Steve)は、貧しいとはお金がないことだとする彼女に対して、「お金がきみをあの(事故をおこした)ジャガーから救い出してくれたか」(91/123, カッコ内は引用者)と問いかけるし、ブッカーの叔母であるクイーン(Queen Olive)は、「体重が重いのは身体の状態であって、病気でない」(158/207)と語っている。これらの言葉は、経済的な成功や、美醜の問題もまた社会的文化的な構築物としての価値基準に過ぎず、絶対的なものではないことを示している。

#### IV. モリスンの意図

ブライドの黒い肌に対する意識に影響を与えたスウィートネス、ジェリ、ブッカーの三人三様の考え方、価値観は、それぞれ白が優位とする価値観を無批判に受け入れ

る態度、黒い肌に対する意味付けを逆転させようとする態度、そして肌の色に価値を付与する社会や文化を打破しようとする態度としてまとめることができた。以下ではトニ・モリスンが、『神よ、あの子を守りたまえ』において黒い肌の意味を取り上げながら、何を目指そうとしているのか、その意図を探ることにしたい。

## 1. 肌の色にこだわる滑稽さ

スウィートネスは白い肌の黒人であり、ルーラ・アンを生むまで彼女の家族も、みな白い肌の黒人であった。彼女の家系的な肌の白さは、少なくとも彼女の祖父母の代まで遡ることが可能であることが言及されている。ゆえに彼女たちは、パッシングを（一時的にかもしれないが）することで、黒人であるがために甘んじなければならない不利益を回避することが出来たのであった。

パッシングをすることによって得られる利益についてスウィートネスは、次のように説明する。

ほかにどうすればドラッグストアで唾を吐きかけられたり、バス停で肘を押しつけられたり、白人に歩道を全部占領させるため溝のなかを歩かされたり、食料品店で、白人の買い物客には無料なのに紙袋に五セント請求されたりするのを、避けることができるの？ (4/9)

また彼女は、自らの肌の色が白いことを利用することについて、「ほかにどうすれば、ちょっとした威厳を保つことができるって言うの」(4/9) と語っている。

アメリカ黒人女性文学においては、パッシングすることが可能な白い肌の黒人女性が繰り返し描かれてきた。ネラ・ラーセン (Nella Larsen, 1891-1964) の『白い黒人』(原題: *Passing*, 1929年) や、ジェシー・フォーセット (Jessie Redmon Fauset, 1882-1961) の『プラムバン』(原題: *Plum Bun: A Novel Without a Moral*, 1928年) などである。しかしこれら先輩作家たちは同時に、黒人であること、あるいは黒人の母であることの責任を放棄したうえで成立するパッシングが破滅を招くことも描き、白人社会が作り上げた価値観に迎合することの危険性を指摘していた。

それではモリスンの場合はどうだったのか。スウィートネスの祖母は、パッシングした結果、自分の子どもに関わりたくなかった。それゆえに彼女は、見捨てたはずの子どもたちに逆に見捨てられる結果を招くことになった。そしてルーラ・アンという黒い肌の娘が生まれたことに恥を感じたスウィートネスは、夫との関係が破綻し、シングルマザーとして多くの困難を抱えなければならないという罰を受けることになった。

しかしスウィートネスの場合、既に見たようにその方法に問題はあったが、娘に

「羨」を行い、人種差別の横行する社会で生き延びる術を教え、黒人の母としての責任を果たす努力はしていた。それゆえに彼女は祖母の場合とは異なり、プライドからの援助を受け続けることができ、子どもを宿したとの報告を受けるなど、黒人社会、あるいは家族から完全に排除されるという罰を受けることだけは免れたのである。

トニ・モリスンは『神よ、あの子を守りたまえ』において、黒人女性の先輩作家や彼女自身のそれまでの作品同様、白い肌を無批判に価値あるものとする価値観や美意識に翻弄される人物たちの滑稽さを描いていた。

## 2. 肌の色の多様性

白い肌のみを美しいと見做し、価値を付与することで人間の序列を規定する社会の滑稽さを、モリスンは肌の色の多様性に着目して描いている。黒人をアメリカ社会において周縁化し、下層の存在へと追いやる価値観は、人間を黒人と白人という二色に分けることによって成立する価値観である。しかし実際には、アジア系の「黄」も存在すれば、先住民の「赤」も存在し、決して合衆国の社会はモノクロで形成されているわけではない。このことをモリスンは、プライドの化粧品「ユー・ガール」について「漆黒からレモネード色、それからミルク色まで、すべての肌の色をした少女や女性たちのための化粧品」(10/18)と説明することで明らかにしている。

しかしモリスンが指摘する肌の色の多様性は、人種や民族を象徴する色の多様性だけにとどまるものではない。既に見た通り、黒人と呼ばれる人たちの中には、プライドのようにタール色の肌を持つ者も居れば、スウィートネスのようにハイ・イエローと呼ばれる白人としてパッシングできるほどに白い肌の者も居る。だからこそアメリカの黒人は、肌の色がより薄い方が良いとする価値観を内面化させ、『青い眼が欲しい』でも描かれていたように、色の薄い黒人が自らの自尊心を保つための道具として利用してきたのだ。

さらに『神よ、あの子を守りたまえ』においてモリスンが描き出す肌の色の多様性は、白人の「白」にも適用されている。モリスンは「いったい何人の白人がニグロの血が血管を流れているのに、それを隠しているか、想像できる？」(3/8)と問いかけ、白人の肌の色とされる「白」の多様性を暗示する。そしてジェリによって白だけの服を着るように勧められたプライドは、白と呼ばれる色が実に多様であることに気づくのである。

最初は白だけの服を買いに行くのは退屈だったが、やがて、白にはいかに多くの色合いがあるのかがわかってきた。象牙、牡蠣、アラバスター、紙、雪、クリーム、ページュ、シャンパン、幽霊、骨の色。小物の色を選び始めると、買い物はいっそうおもしろくなってきた。(33/48)



このようにモリスンは、同じ「黒」や「白」としてまとめられる存在であっても、その実は多様な色が内在していることを指摘し、世界をカラフルな存在として描写している。さらにモリスンは、ブライドが「まるで小路にいたのが自分自身だったかのように」(96/129) 感じることが出来るレイン (Rain) という白人の少女を登場させたり、ブライドとレインを助けた白人ヒッピーの夫婦を登場させたりすることで、白人の実質的な多様性、権力から疎外された白人の存在をも描き出している。このように肌の色の多様性を描くことでモリスンは、「白」のみを唯一の価値であるとすることの滑稽さを指摘しているのだ。

### 3. 黒い肌嫌悪の裏側にあるもの

このようにモリスンは『神よ、あの子を守りたまえ』において、白い肌へのみ価値が付与される社会や文化構造が人為的に作られた幻想でしかないことを指摘した。そしてそれは同時に、新たな価値観によって社会や文化を作り変える必要性を示すことにつながる。その可能性の一つとして示されたのが、母親からさえも嫌悪され、触れることすら拒絶されたブライドの黒い肌の色が、「美」として認識され、リージョナル・マネージャーとして活躍することができるようになったことである。つまり黒い肌に与えられた意味の転換である。

しかしブライドが手にした「美」もまた虚構でしかあり得ない。モリスンは、「嘘かまことか、これがわたしを作り、さらに作り直した」(36/51, 強調点は引用者)として、ブライドの美と成功が作られたものでしかないことを示す。さらに彼女は、「わたしの性生活がダイエットコーク——人をだます甘さはあるが、栄養はない——のようになるまでは」(36/52)と指摘することで、ブライドが手にした成功が肌の色の上に成り立った虚構であり、中身のないものであることを指摘している。

ブライドが作り上げた「美」は虚構でしかなかった。だからこそ、彼女の「美」は白人の意識を揺るがすことはなく、白人優位の文化を揺るがすことはなかった。ゆえにブライドは、北部の医学生 of 彼女として両親に紹介されたことを「人種差別的ジョーク」と呼び、「両親はその暖かさ——いかにまがい物であろうと——と魅力で、彼を凌駕していた」(37/53)と回想している。

この虚構を作り上げるのは、他者の視線であった。確かにブライドはジェリーの助言に従って、自らの肌の色の「見せ方」を変更した。しかしここで行われたのは、「見せ方」を変えることのみであり、彼女の肌の色は何も変わっていない。それにも関わらず、彼女に対する評価が「醜」から「美」へと変わるのには、彼女の肌に向けられる視線が変わったからである。

このように考えるならば、黒い肌を醜いものとし、蔑む文化構造を打破するために必要なのは、肌の色に対する意味付けを変えることなのではなく、肌の色に意味を与

える文化を解体することである。その意味において、黒人自身が、意識的であるにせよ無意識に刷り込まれたものであるにせよ、黒を蔑む意識を内在化している限り、肌の色の意味を変えようとする努力は失敗に終わらざるを得ないのである。

1970年代のアメリカ社会では、“Black Is Beautiful”をスローガンに掲げ、黒人の権利獲得運動が活発に展開されていた。この時、民族の力量を美しさで測定し、人間の内面性ではなく外観に焦点が当てられる傾向にあることの危険性を、すでにモリスンは指摘していた(“Rediscovering Black History” para. #04)。そしてそのような立場は、彼女のすべての作品において貫かれている。ゆえに『神よ、あの子を守りたまえ』においてプライドが、本当の意味で自らの肌の色に対する否定的な意識を払拭するのが、外見的な美しさに対して他者からの称賛を得たことによってではなく、称賛を得たその身体を幼児化させた後であることは非常に示唆的である。

身体が徐々に幼児化するという不思議な体験は、ブッカーが彼女の元を去ったために生じた出来事であった。しかしこの経験を通じて彼女は、象徴的に人生を生き直し、黒い肌のための虐げられた原体験を克服し、美を自らの成功のために利用していた浅はかさを超え、再びブッカーと向き合うことができるようになったのだ。さらに彼女は、黒い肌のために手にすることが叶わなかった「彼女が生涯待ち望んでいた手」「信頼と愛情の手」(175/228)を手に入れ、虚構物としての肌の色から解放された将来を想像することができるようになったのである。

『神よ、あの子を守りたまえ』は、プライドが妊娠したことを知らせて終わる。そして物語を締めくくるのは、娘の妊娠を知らされたスウィートネスの語りである。大社淑子は「訳者あとがき」において、出産に始まり妊娠で終わるこの物語を、「一種の循環小説」(238)であると指摘している。しかし黒い肌嫌悪に取り憑かれたスウィートネスの子育てと、黒い肌嫌悪の裏側に社会的な虚構物としての黒い肌への意味付けがあることを知ったプライドの子育てが同一のものであるはずがない。もちろんスウィートネスが予言するように、プライドとその子が黒い肌のために苦勞することはあるだろう。しかしその問題への対処法は、スウィートネスとプライドとでは異なることになるだろう。よってこの物語は循環小説ではなく、肌の色によって序列づけられる社会や文化の価値観を解体し、肌の色によって人間が価値づけられることのない社会へ向かう螺旋を描く構造として評価すべきだろう。

上昇をイメージさせる螺旋構造として物語の構造を理解する時、風呂本惇子の「連鎖を解く力」における、「新しい方向へ人生を切りひらき始めた娘への祝福」「和解と平穏のニュアンス」「新しい命が宿り、希望のニュアンスすら加わっている」(233)との指摘がよりの確であるように思われる。

## まとめ

トニ・モリスンは作品を書くことについて、下記の通り語っている。

フォークナーの作品は南部に根ざしていながらも、(中略) 普遍的でもあります。(中略) 私がやりたいのはそういうこと、つまり一つの特定の世界について書きながら、結果として普遍的になるということです。(中略) 私から見れば、黒人しか存在しないのです。私が「人々」といえば、黒人のことです。(木内ほか編, 27)

最後に本研究のまとめとして、『神よ、あの子を守りたまえ』においてどのような普遍性が描かれ、アメリカ黒人女性文学史においてどのように位置づけることができるのかを検証する。

### 1. 黒い肌を成功の源泉に変えたブライドの成長

醜さと劣等性の烙印であるより黒い色の肌で生まれたブライドは、両親からも嫌悪され、両親の夫婦生活すらも破壊することになった。また母からは、白い肌が価値あるとされる社会の中で生き延びるために、行儀良く抵抗せずに生きるよう躾けられた。その結果ブライドは、高校を卒業するのと同時に自らの肌の色に過剰の意味付けをする田舎を捨てることになった。

このブライドの行動は、新たな自分を見つけるための旅立ちであったと位置づけることが可能である。そして彼女は、新しい自分の「見せ方」を学ぶことによって成功し、成長したと言える。ここで重要なことは、これまで負のイメージでしかなかった黒い肌が、成功の根拠となり、ブライドに自信をもたらしたことである。つまり身体的特徴であるため自らの努力では変更できない肌の色の問題が、自らの意思と努力で乗り越え得るものとして提示されたのである。このことは、決してブライドだけに特有のものではなかった。社会の変化についてスウィートネスに次のように語る。

わたしが若かった頃より、いろんな事情がほんの少し変わってきた。青黒い肌は、テレビのいたるところに出ているし、ファッション雑誌や、コマーシャルにもあふれ、映画スターにも及んでいる。(176/231)

スウィートネスのこの言葉は、社会の変化を示すのと同時に、社会が変わっていないことも示している。ここに登場するのは、ブライド同様に黒い肌にも関わらず成功

を手にした黒人であるが、同時に黒い肌を利用することで成功を手にした黒人でもある。そしてその成功は、自らの努力によって得られたように表面上は見えながらも、実際には視聴者という他者からの視線によって与えられたものだった。つまり肌の色を意味付けするという社会構造は変わっていないのである。

よってブライドの成長が完成するためには、他者からの視線によらない価値観を手にする必要があった。既に見た通り彼女は、身体が幼児化するという非現実的な経験をする。この再成長は単に身体的な成長に留まるものではなく、精神的な成長でもあった。そしてその精神的な成長は、肌の色に過剰な意味付けを行わないという価値観の獲得によって達成するわけだが、それは他者の視線を気にしない態度を獲得することで象徴的に達成されることになる。身体的な回復を達成した場面について次のように記されている。ブライドとブッカーは協力してクィーンを火事から救出する。その後、ブライドはTシャツを脱いで火が燃え移ったクィーンの髪を覆った。この時ブライドは、彼女の身体が元に戻っていることに気がつく。

救急車が停まると、人の群れはさらに大きくなり、見物人の何人かは立ちすくんでいるように見えた——だが、呻きながら救急車に運びこまれる患者を見ていたわけではない。彼らは大きく見開いた眼を、ブライドの愛らしい大きな胸に釘づけにしていたのだ。見物人がいかに喜んでいようと、ブライドの喜びに比べればゼロに等しい。嬉しさのあまり、医療技術者が差し出す毛布をすぐには受け取ろうとしなかった——ブッカーの表情を見るまでは。(165-166/216)

身体が幼児化しているブライドは、クィーンを助けるため躊躇することなくTシャツを脱ぎ捨てる。しかしこの時、彼女の身体は元に戻っていたため、大人の女性の胸が露になってしまう。火事騒ぎで集まっていた野次馬たちの視線は、彼女の胸に釘づけになる。しかし彼女は、その視線をまったく意に介することはない。つまりこの場面は、彼女が身体的な成長と同時に、自らの身体を喜んで受け入れたこと、そして他者から向けられる視線を気にすることはないという態度を獲得したことを象徴的に示していると言える。

ブライドの身体的変化は、6歳位とされるレインのジーンズが丁度良いくらいまで小さくなるというものだった。大人の女性がここまで小さくなるのだから、周囲に居たスティーヴとエヴリン (Evelyn)、クィーン<sup>12</sup>、ブッカーが変化に気がつかないはずがない。しかし彼／彼女たちはブライドの変化についてまったく言及しない。つまりこれらの人々は、ブライドの身体に対して意味付けを行うような視線を向けていないのである。そして彼／彼女たちこそが、ブライドに社会的、文化的な価値とは他者の視線によって構築されたものであることを教えた人たちであった。

このように考えるとプライドの身体に生じた変化と再成長という過程は、黒い肌の意味に関して植えつけられた意識をリセットするだけではなく、価値観とは他者の視線によって構築されるものだという認識の形成と、それ故に他者の視線を必要以上に気にしないという態度の獲得を象徴的に示していたのだと言えるだろう。つまりモリスンは、プライドの成長を黒い肌をプライドに変え成功をおさめることで完成させたのではなく、プライドがそれまでとは異なる新しい価値観を獲得することで完成させたのだ。

## 2. アメリカ黒人女性文学史における『神よ、あの子を守りたまえ』の位置

マイケル・オークワードはアメリカ黒人女性文学の特徴を、「呼応する魂」(19)と名付けている。男性文学では先輩作家は競争相手と見做され、繰り返しを回避しようとする。一方、黒人女性文学の作家たちは、先輩作家を共同作業者と捉え、受容したり拒絶したりするなどその方法はさまざまであるが、先輩作家の成果を取り込みながら創作活動を行っている。黒人女性作家たちは、先輩作家たちが描いた世界、主張を意識し、引き継ぎながら発展させてきたのである。このような認識に基づきながら『神よ、あの子を守りたまえ』を、アメリカ黒人女性文学史に位置づけてみたい。

モリスン文学にみられる他の黒人女性作家との「呼応する魂」とは、黒い肌の意味だと言える。そしてその魂は、ここまで分析してきた通り、『神よ、あの子を守りたまえ』においても着実に引き継がれている。

それではアメリカ黒人女性作家たちは黒い肌の問題をどのように扱い、呼応させてきたのだろうか。白い肌を「美」、黒い肌を「醜」と位置付ける価値観を堅持しながら、その制度の中で利益を得ようとした物語として、ネラ・ラーセンの『白い黒人』や、ジェシー・フォーセットの『プラムバン』などのパッシング小説がある。また白人の価値観を最上のものと見做すことで生じる問題を取り上げたのは、アン・ピトリー(Ann Petry, 1908-1997)の『ストリート』であった。さらにモリスンの『青い眼が欲しい』には白い肌や白人的価値を無批判に追い求める少女ピコーラが描かれている。黒人だけが住む町を舞台にした『パラダイス』は、肌の色に与えられた価値観に挑戦しているようにも見える。しかし実際には、黒い肌に最高の価値を与えることは、肌の色に基づくヒエラルキーを温存することであり、白人の枠組みから逃れられてはいないことを示している。『神よ、あの子を守りたまえ』におけるスウィートネスやジェリはこの枠に収まるだろう。

ポール・マーシャル(Paule Marshall, 1929-)の『褐色砂岩の家』(原題: *Brown Girl, Brownstones*, 1959年)やロレイン・ハンズベリー(Lorraine Hansberry, 1930-1965)の『日向の干し葡萄』(原題: *A Raisin in the Sun*, 1959年)は、白人が規定した肌の色に基づく価値観から逃れ、自身の価値観を求めるための旅立を描いた。ゾ



ラ・ニール・ハーストン (Zora Neale Hurston, 1891-1960) の『彼らの目は神を見ていた』(原題: *Their Eyes Were Watching God*, 1937年) は、旅立だけではなく、自らの夢を描くことで肌の色に基づく価値観から逃れようとした物語であった。『神よ、あの子を守りたまえ』のプライドの旅立ちはこの枠組みに収まるだろう。

またアメリカ黒人女性文学においては、人種差別的な社会を生き抜くための連帯もまた大きなテーマとなっている。ここでも黒い肌が「呼応する魂」として作用している。連帯をテーマにしていた作品には、アリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) の『カラーパープル』(原題: *The Color Purple*, 1982年) や、グロリア・ネイラー (Gloria Naylor, 1950-2016) の『ブリュースタープレイスの女たち』(原題: *The Women of Brewster Place*, 1982年) などがある。『神よ、あの子を守りたまえ』では、人種差別的な社会での生き延び方を伝授したジェリとプライド<sup>13</sup>、あるいは怪我したプライドと彼女を助けたヒッピーの白人夫婦、相互作用でトラウマを乗り越えるプライドとブッカー、二人を見守るクィーンなど、人種やジェンダー、世代を超えた連帯が目指されている。

『神よ、あの子を守りたまえ』は、黒い肌の意味という黒人女性文学の「魂」を継承する作品であった。しかしモリスンの挑戦は、先輩作家に連なるだけには留まらない。これまで見てきた通り、黒い肌に付与される意味をずらしたり、新しい価値観の確立を目指したりするなど、黒人女性文学の深化／進化が目指されているのだ。制度は整っている今日の社会では、多くのアメリカ黒人が未だに周縁に追いやられているのは、肌の色や人種の問題ではなく、個人の努力や能力によるものだとする新自由主義的な意見が主張されるようになった<sup>14</sup>。また保守的、差別主義的な政治が台頭している。そのような社会情勢の中、『神よ、あの子を守りたまえ』は、政治的な文学を目指すモリスンの新しい挑戦、新しい出発でもあるのだ。

#### 《注》

- 1 アメリカ研究分野においては、黒人よりもアフリカ系アメリカ人やアフリカン・アメリカンと表記することがより好ましいとされている。しかし本研究では、特に着目するのが肌の色という問題であり、また合衆国における黒人に対する差別の根拠がアフリカ出身ということにではなく、「黒い」肌の色にあるという状況に言及するため、本稿においては黒人、またはアメリカ黒人と表記する。
- 2 作品は4部構成となっており、各部分は語り部の名前を冠したパート（一人称で語られる）と、名前が付されていない地の文（三人称で語られる）とで構成されている。なお語り部として名前が挙げられているのは、スウィートネス、プライド、ブルックリン (Brooklyn, プライドの同僚／友人)、ソフィア (Sofia Huxley, プライドの偽証によって15年間服役)、レインの5人の女性である。
- 3 ルーラ・アンが生まれたのは1990年代であると記されている (6/11)。成長しリ

ージョナル・マネージャーとなった彼女は23歳だとの記述があるので(27/40)、物語の舞台は2010年代となる。

- 4 風呂本は、92年のロス暴動、また2015年にサウスカロライナ州で発生した黒人9人の殺害事件、16年にルイジアナ州、ミネソタ州で連続して発生した黒人男性が白人警官に射殺された事件、それに怒った黒人によって白人警官が襲撃されたテキサス州の事件を例に挙げながら、人種差別を内面化し自ら呪縛するスウィートネスのような存在を「一概に「時代錯誤」と片付けられない」(222)としている。また本原稿執筆中であった2017年8月、TVではアメリカ大統領が差別主義者(人種差別も含む)を擁護するような発言をしたことに関するニュースが盛んに流れていた。
- 5 2015年4月、メリーランド州ボルティモアで25歳の黒人青年フレディ・グレイが逮捕され警官から受けた暴行により死亡する事件が発生。この事件に対する抗議として、ボルティモアで暴動が発生した。その抗議運動の一群のなかに、トーマス・グラハムは16歳の息子マイケルを見つける。彼女は、息子を殴り、罵声を浴びせ、家に連れ帰ろうとする。その様子がメディアによって撮影され、報道された。のちに彼女はCBSの取材に対し、「私は息子をフレディ・グレイのようにしたくはなかった」と、当時の心境を語っている。
- 6 フェミニズムにおける美醜に関する議論のまとめとしては、西倉実季の「「美」を論じるフェミニズムの課題」を参考にした。
- 7 パッシングとは、白い肌の黒人が白人のように振る舞うことである。人種隔離政策が行われていた時代において、パッシングした黒人は白人専用の施設を利用したりしていた。しかしパッシングするためには、徹底して自身が黒人であることを隠さなければならず、そのためには黒人コミュニティとの繋がりを断ち切らなければならないこともあった。
- 8 黒人社会の中においても、肌の色がより白に近い方が優位であり、美しいとみなされることが多々あった。『青い眼が欲しい』には次のようなやりとりが描かれている。

「こんなひとの黒い父さんのことを、なんでわたしが気にするのよ？」とモーリーンはきいた。

「黒い？ あんた、だれのことを黒いって言うの？」

「あんたのことよ！」

「あんた、自分のことをとてもかわいいと思ってるんだね！」

(中略)

「わたしはかわいいわ！ だけど、あんたたちは醜いのよ！ 黒くて醜くて、黒んぼやーいだ。わたしは、かわいいわ！」(73/85-86)

- 9 モリスン作品からの引用については日本語訳を使用する。ただし必要がある場合

は、一部改訳している場合もある。なお出典については（ ）内に原書／訳書の順に示す。

- 10 ネリー・マッケイ (Nellie McKay) によるインタビューでモリスンは、このアフリカ人女性について、本物であり、完全であり、自分自身を持っている女性であり、ジャディーンがもともと持っていたものを表していると説明している (147-148)。
- 11 その多くは息子スレイド・モリスン (Slade Morrison) との共著で、『子どもたちに自由を』(長田弘訳, 原題: *The Big Box*, 1999年), *Peeny Butter Fudge* (2009年), 『ほんをひらいて』(さくまゆみこ訳, 原題: *Please, Louise*, 2014年) などがある。
- 12 クィーンは身体が変化する前のブライドを知らない。しかし、甥のブッカーの恋人らしきブライドが現れた時、彼女の身体を見て疑問に思わないはずがない。それにも関わらず、クィーンはブライドに身体について問うことはしなかった。
- 13 スウィートネスとブライドの関係も「守る」をキーワードにした連帯の一つと見ることが出来るのかもしれない。
- 14 この問題については、1960年代以降の解放運動を闘い権利を拡大した世代と、既にある程度の権利が認められる時代に育った世代との間の世代間格差としての側面も含まれている。この世代間格差の問題については、ポスト・ソウル、ポスト・フェミニズム、第三波フェミニズムなどの台頭とも関わる問題であり、別稿で詳しく論じることにしたい。運動や体験、問題意識をいかにして語り継ぎ、継承し得るのかについては、現代の緊急の課題の一つと言える。

#### 《主要参考引用文献》

- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. (1970) New York: Vintage Books, 2007. (トニ・モリスン著, 大社淑子訳『青い眼がほしい』朝日新聞社, 1981年)
- . "Rediscovering Black History: It is Like Growing up Black one more" *The New York Times*, August 11, 1974. (<http://www.nytimes.com/1974/08/11/archives/rediscovering-black-history-it-is-like-growing-up-black-one-more.html> 閲覧日2017年8月3日)
- . *The Tar Baby*. (1981) New York: Vintage Books, 2004. (トニ・モリスン著, 藤本和子訳『タール・ベイビー』早川書房, 1995年)
- . "Rootedness: the Ancestor as Foundation." Mari Evans. ed. *Black Women Writers: A Critical Evaluation (1950-1980)*. New York: Anchor, 1984: pp. 339-345.
- . *Paradise*. (1997) London: Vintage Books, 1999. (トニ・モリスン著, 大社淑子訳『パラダイス』早川書房, 1999年)
- . *God Help the Child*. (2015) New York: Vintage Books, 2016. (トニ・モリスン著, 大社淑子訳『神よ、あの子を守りたまえ』早川書房, 2016年)

- 風呂本惇子「連鎖を解く力：『神よ、あの子を守りたまえ』における「母代わり」の意味」風呂本惇子ほか編『新たなるトニ・モリスン』金星堂，2017年：218-236頁
- 風呂本惇子ほか編『新たなるトニ・モリスン：その小説世界を拓く』金星堂，2017年
- 木内徹ほか編『現代作家ガイド4 トニ・モリスン』彩流社，2000年
- 西倉実季「「美」を論じるフェミニズムの課題：二元論的思考を超えて」『F-GENS Journal』(No.4) お茶の水女子大学21世紀COEプログラムジェンダー研究のフロンティア発行，2005年9月：61-67頁
- 大社淑子「訳者あとがき」トニ・モリスン著『神よ、あの子を守りたまえ』早川書房，2016年：234-239頁
- 鶴殿えりか『トニ・モリスンの小説』彩流社，2015年
- オークワード，マイケル（木内徹訳）『アメリカ黒人女性小説：呼応する魂』（1989）彩流社，1993年
- ポーリユー，エリザベス・A（荒このみ訳）『トニ・モリスン事典』（2003）雄松堂出版，2006年
- スミス，ヴェレリー（木内徹ほか訳）『トニ・モリスン：寓意と想像の文学』（2012）彩流社，2015年
- Aithal, Saligrama K. "On a Wing and a Prayer *God Help the Child*." Saligrama K. Aithal, *Toni Morrison, Novelist*. GPSIA, 2016: pp. 101-111.
- Charles, Ron. "Toni Morrison's familiar, flawed 'God Help the Child'." *The Washington Post*, April 14, 2015. ([https://www.washingtonpost.com/entertainment/books/toni-morrison-s-familiar-flawed-god-help-the-child/2015/04/14/6cde0cfe-dec6-11e4-a500-1c5bb1d8ff6a\\_story.html?utm\\_term=.4950618b65d6](https://www.washingtonpost.com/entertainment/books/toni-morrison-s-familiar-flawed-god-help-the-child/2015/04/14/6cde0cfe-dec6-11e4-a500-1c5bb1d8ff6a_story.html?utm_term=.4950618b65d6) 閲覧日2017年8月3日)
- Goldberg, Jesse A. "From Sweetness to Toya Graham: Intersectionality and the (Im)Possibilities of Maternal Ethics." Lee Baxter, et al. eds. *Toni Morrison: on Mothers and Motherhood*. Bradford, ON: Demeter Press, 2017 (Kindle version を使用)
- Iqbal, Razia. "God Help The Child by Toni Morrison, book review: Pain and trauma live just under the skin." *Independent*, April 09, 2015. (<http://www.independent.co.uk/arts-entertainment/books/reviews/god-help-the-child-by-toni-morrison-book-review-pain-and-trauma-live-just-under-the-skin-10164870.html> 閲覧日2017年8月3日)
- McKay, Nellie. "An Interview with Toni Morrison." (1983) Danille Taylor-Guthrie, ed. *Conversation with Toni Morrison*. Jackson, MI: University Press of Mississippi, 1994: pp. 138-155.
- Parham, Jason. "Toni Morrison Already Wrote the Best Book of 2015." Gawker

Review of Books, December 02, 2014. (<http://review.gawker.com/toni-morrison-already-wrote-the-best-book-of-2015-1665532090> 閲覧日2017年8月3日)

Walker, Kara. “Toni Morrison’s ‘God Help the Child’.” *The New York Times*, April 13, 2015. (<https://www.nytimes.com/2015/04/19/books/review/toni-morrisons-god-help-the-child.html> 閲覧日2017年8月3日)

Wyatt, Jean. “Love, Trauma, and the Body in *God Help the Child*.” Jean Wyatt, *Love and Narrative Form in Toni Morrison’s Later Novels*. Athens, GA: University of Georgia Press, 2017 (Kindle version を使用)

Website “Toya Graham, Baltimore Mom: 5 Fast Facts You Need to Know.” by Tom Cleary. Last Update, April 20, 2015. (<http://heavy.com/news/2015/04/toya-graham-baltimore-mom-mother-smack-son-michael-graham-video-riots-rioting-home-praise-video-interview-name-children/> 閲覧日2017年8月3日)